

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都渋谷区渋谷1-21-18
管理機関名 学校法人渋谷教育学園
代表者名 田村哲夫 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月1日(契約締結日)～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 渋谷教育学園幕張高等学校

学校長名 田村哲夫

3 研究開発名

多角的アプローチによる交渉力育成プロジェクト

4 研究開発概要

SGH指定最終年度に当たり、過去4年間で構築してきた取り組みを精査し、指定以前からの本校独自の取り組みとの整合性を高め、より効果的な研究開発となるよう留意した。

具体的には、本校の考える「交渉力」の定義を「独り勝ちしない、誰も取り残されることがない、Win-Winの妥結点を見出す力」と再確認し、主張に固執せず、異なる主張や価値観を受容し、当事者全員が納得できる妥結点を見出す思考の柔軟性や視野の広さを養成するために、幅広い読書、意見交換、情報収集・分析、論理的思考、プレゼンテーションを継続的にトレーニングした。また、コミュニケーションツールとしての英語力の進展を図った。これらの能力は、本校の教育目標である「自調自考」「国際人としての資質」の力

内研修会を行い、共通理解が進むよう支援している。さらに、長期的な視野のもと、学園の取り組むべき戦略を管理職と共有するために、両校の副校長も交えた戦略委員会を立ちあげ、実践に向けた取り組みを支援している。このような中で、さらなる発展的な実践につなげるため、複数の教科と学年、国際部が協力して課題研究が進められるよう、副校長を委員長としたスーパーグローバルハイスクール推進委員会を設置している。委員会は定期的に会合を開くとともに、学内の授業研究と発表を行い、課題研究の成果を教職員全体が共有できるように取り組んでいる。また、課題研究に関連する講演会や交流会を効果的に実施できるように大学、企業、農林水産省、厚生労働省、各国大使館、NPO 法人などに依頼し、実現させた。

世界高校生水会議(Water is Life 2018)では、幕張高等学校と渋谷高等学校のSGH推進委員会が定期的に情報交換を行う機会を設け、双方の学校で役割を分担し、自主的に希望したボランティア生徒の運営で実施した。中でも、「東京オリエンテーション」のコースや質問事項の精選、「有明水再生施設」や「谷津干潟」訪問時のガイド、全体会や分科会の進行を担ったファシリテーター、「ワークショップ」のアシスタント、受付、会場案内、昼食献立考案、音響・映像、記録などの裏方業務全般にわたり、「生徒の手による生徒の会議」が実現できた。また、国際交流に対する保護者の関心や理解も高く、約140名の来日生徒全員のホームステイを受け入れていただいた。各ホストファミリーにおいても「食」を中心とした日本文化紹介や交流が有意義に行われた。

海外研修は、SGH活動の一環として、北京研修、シンガポール研修、ベトナム研修を実施してきたが、指定後3年を経過した時点でシンガポール研修、ベトナム研修を、4年を経過した時点で北京研修を廃止した。3地域とも、SGH指定以前から本校独自の海外研修として実施しており、SGH指定後は各研修を2コースで並行して実施してきたが、両コースの行程を見直すことで一本化できると判断したからである。廃止による一本化後も、指定以前の現地との関係から、より濃密な内容の研修が実施でき、SGH活動を充実させることができた。

運営指導委員会を設置し、取り組みの評価・検証を行うとともに、プログラムの進捗状況、経理を含めたプロジェクトの管理状況についての確認・報告を行った。2月の指導委員会では、本プログラムへの適切な助言をいただくことができた。中でも、世界高校生水会議(Water is Life 2018)では、課題研究の深さと多様性、全員英語による発表の質や、生徒による会議の運営に高評価をいただいた。また、SGH活動後の継続的な取り組みの必要性にも言及され、今後のあり方を考える契機を頂戴した。

学内の取り組みに関しては、学校広報紙を通じて定期的に保護者や学校関係者へ周知し、また授業参観やプロジェクトの発表会を公開(SGH研究報告会、文化祭における報告会、世界高校生水会議 Water is Life 2018 など)するなどして、取り組みへの理解と普及に努めた。さらに、校内の各所にSGHコーナーを設置し、5年間の取り組みを常設展示し、校内生徒だけでなく、校外からの訪問者にも理解しやすくした。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程期間

業務項目 \ 月	実施期間 (契約日～平成30年3月29日)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
①授業 (第1～3年) 「食」に関連する 課題研究や背景の理解	家庭科	課題研究個人調査			まとめ			クラス発表			学年発表会	
	地理	(自給率・農村問題・気候と農産物・輸出入品等の分野)										
	生物	(生態系物質循環、有害物質の生物濃縮、遺伝子の発現)										
	保健	(フードサプライチェーンでの食品安全確保の正確な実態把握)										
	情報	(身の周りの課題発見・解決策調査)										
	英語表現Ⅱ	(「食」のトピックで現状把握、課題発見、解決策模索、発表)										
課題研究や交渉力育成 に必要となるスキルの 養成	英語ⅠⅡ	(グローバル課題の正しい理解、課題把握と解決策)										
	国語	(評論文等で構成把握、論点整理、伝わる要旨の作成など)										
	数学	(統計分野でのデータ収集、分析、結果処理や幾何での論理展開)										
	公民	(経済分野での貿易収支から見る現状把握と課題など)										
②総合的な学習 (第1～3学年) 「自調自考論文」	1～3年	(論文テーマ決定 面接指導 中間報告1 面接指導 中間報告2) (論文提出 審査 加筆修正 要旨作成 優秀作品選定)										
課題研究や背景の理解	特別講演 ①～②	①食の安全保障					②食品ロス					
課題研究や交渉力育成 に必要となるスキルの 養成	課題研究 発表会 ③～⑥	④SGH海外研修発表会 (高校2年生)					③家庭科課題研究発表会		⑤英語表現Ⅱ発表会 (高校2年生)			
		⑥英語表現Ⅱ発表会 (高校3年授業内発表)										
③海外研修 (第1, 2学年)					②米国				①北京			
課題研究や交渉力スキル 養成					③ハーバードリーダー養成				④ベトナム		⑤シンガポール	
											⑥英国	
④特別活動等 (第1～3学年)		(英語で議論できる力の養成講座)										
課題研究や交渉力 に必要となるスキルの 養成						Water is Life 2018						

(2) 実績の説明

①授業

ユネスコ文化遺産に指定された「和食」の研究を通して、研究対象が他の文化理解へと波及し、教科を横断した全校的な取り組みとして総合的な学習に発展した。日常の授業単位の活動が相互に作用し合い、相乗効果を上げている。

(1) 家庭科・英語科・LHR：留学生を含む高校1年全員 380名

中間評価後の中心的改善点であった「全体化」を意識した、教科(家庭科&英語科)、LHR、特別活動が連動した取り組みができた。具体的には、

- ①「食」に関するクラス課題設定 〈1学期 家庭科〉
- ②班課題設定 〈1学期 家庭科〉
- ③個人課題設定 〈1学期 家庭科〉
- ④個人課題研究 〈夏季休業中 家庭科・LHR〉
- ⑤班集体約 〈2学期 家庭科・LHR〉
- ⑥クラス集約(冊子化→学年共有) 〈2学期 家庭科・LHR〉
- ⑦班ポスター制作 〈2学期 家庭科・英語科・LHR〉
- ⑧班ポスタープレゼンテーション(英語化) 〈2学期 家庭科・英語科・LHR〉
- ⑨クラス代表選抜 〈2学期 家庭科・英語科・LHR〉
- ⑩PPTを用いた学年プレゼンテーション 〈3学期 家庭科・英語科・LHR〉
- ⑪事後アンケート 〈3学期 LHR〉
- ⑫フィードバック 〈3学期 LHR〉

という一連の流れが確立できた。その結果、「個人」から「全体」、「家庭科」・「英語科」から「LHR」・「学年」、「食」から「交渉力」へと発展させる関係が構築できた。

なお、「食」に関する視点、正しい課題の理解、現状把握を目指して、昨年度同様に下記の特別講演①・②を行った。

【講演会】

- ・SGH特別講演会①(高1全員 380名)
「多様な視点で世界の食料安全保障を考える」
講師：株田文博 氏 (政策大学院大学教授)
- ・SGH特別講演会②(高1全員 380名)
「フードロスについて」
講師：井出留美 氏 (Office 3.11 代表取締役)

(2) 英語科：高校2年全員 359名・3年文系 145名

「英語表現Ⅱ」において、本校の考える「交渉力（情報を扱う力、問題を見極める力、積極的に聴く力、伝える力、協働する力）」を習得するために、学習活動として、「会話術」「インタビュー」「パラグラフ」「プレゼンテーション」の練習を反復して行った。また、前年度に引き続き、毎時間の帯活動として「食」「水」をテーマにスピーチを行った。この活動は、テーマに関するボキャブラリーの増強と英語による発信力の向上を目指した。

これらの活動を反復して2年間継続することで、最終的には、自由なトピックで表現力豊かな文章を作成したり、スピーチしたりする力の習得や、それを読んだり、聞いたりして、質問やコメントができるようにすることを目指した。

その成果の確認と、空間配置を表すパラグラフライティング指導の延長として、授業の後半には「理想の街」（原題 Innovative Town）のプロジェクトに取り組んだ。生徒の柔軟な発想と解決能力、今日の都市が抱える諸問題などの観点から、高校生らしい示唆に富んだ発表ができた。

(3) 保健体育科：高校2年全員 359名

年間指導計画の「食品衛生活動のしくみと働きについて」の学習分野を中心に、本校のSGHテーマ「食」を追究した。教科書では、「食中毒」「食物アレルギー」「食品添加物」「食品安全基本法」「食品衛生法」「HDCCP」などを学習した。

学習成果の確認として、生徒による「食」に関する課題発表を行った。食糧問題の解決策として、「培養肉」や「昆虫食」に触れる発表もあり、今後の食糧問題の複雑さを痛感させられた。

(4) 情報科：留学生を含む高校1年全員 380名

本校の考える「交渉力」を養成するために、年間指導計画の「コミュニケーション」「問題解決のための情報活用」「プレゼンテーション」を中心に、家庭科や英語表現Ⅱの課題研究テーマと連動した授業を展開した。

情報の理解と選択、プレゼンテーションシートの作成や発表に有効に作用し、家庭科の課題研究発表や英語科の英語表現Ⅱ課題研究発表やWater is Life 2018発表の質の高さにつながった。

(5) 地歴公民科：高校2年選択者

1年次に「食」に関する学習を色々な角度から学んできたことを踏まえて、関連する「植生と土壌」「水の循環」「水産業（マグロ・うなぎ・クジラの資源保護と規制）」「食糧問題」などを扱い、知識を広げた。

また、夏季休業中の課題研究レポートを英語でのレポートとしてまとめてもらった。

(6) 理科生物：高校2・3年選択者)

生物分野の「遺伝子組み換え」「生態系汚染」を、SGHテーマ「食」と直接関わる問題として学習した。

遺伝子組み換えの理解には、遺伝子に関する基本知識が必要となる。それに加え、遺伝子組み換えの具体的内容について学習した。また、生態系分野では、危険物質濃縮過程の理解、土壌汚染では、その改良の困難さと健康被害について学習した。

(7) 国語科：高校1・2・3年全員 1085名

「国語表現」「現代文」の授業を通して、さまざまなジャンルの文章を論理的に読み取る読解力と、正しく明確な日本語によって表す表現力の養成を目指した。本校が考える「交渉力」の基本をなすスキルを養成する根本科目と位置づけている。

具体的な活動としては、要約文や小論文の作成、意見発表と聞き取りを中心に据え、感想文の相互批評や生徒の創作作品の鑑賞等で、他者の価値観や卓抜で個性的な発想や表現技法を学んだ。

(8) 数学科：高校1・2年全員 739名

高校1年では、「交渉力」の基礎となるスキル養成と関連する、「データの分析」分野で、統計の基本理解に基づき、データの整理・分析を行い、傾向を把握できる力を養成した。また、「命題と条件、証明」分野で、検証の理解、論理的思考力の養成に努めた。

高校2年では、「確率分布と統計的推測」分野で二項分布・正規分布を扱い、統計的な推測への足がかりを学んだ。

②総合的な学習（高校1・2・3年全員 1085名）

本校が開校以来取り組んでいる「自調自考」論文は、生徒個人の興味関心から個人テーマを設定し、約2年間をかけて調査研究を続け、論文に仕上げる。その間、指導教員との数度の面接によりテーマ追究の妥当性や調査考察の方法や方向性の指導を受ける。論文提出後は文化祭での一般公開や審査を経て、全員分の要約集や優秀作品集の冊子化に向けて、論文としての質や体裁を最終的に整えていく。この論文のテーマが、進学先の大学や研究所での研究テーマに発展して、生涯の研究テーマとなって、現在も研究を続けている者もいる。

本校のSGHテーマ「食」と直接関連するテーマを全員が設定するわけではないが、年々増加傾向にあり、SGHのさまざまな取り組みや先行学年からの情報が好影響を与えていると考えられる。（研究報告書参照）

【「自調自考」論文テーマ（2018年度 抜粋）】

《食に関するテーマ》

- ・2020 東京オリンピックまでにハラール対策は間に合うのだろうか
- ・まにあうのか！ 東京五輪の食料調達！
～各国の有機（オーガニック）農業への取り組みから考える～
- ・培養肉を家庭で食べる日は来るのか
～概要と現在の廉価化技術、今後の倫理的、社会的課題について～
- ・培養肉とその未来
- ・B級グルメで町おこしは出来るのか
- ・21世紀の食料資源としての昆虫の可能性
- ・コンビニ業界における食品廃棄問題
- ・目玉焼きに合う調味料の研究
- ・納豆をおいしく食べるために
- ・駅弁を世界に広めるには
- ・中国産食品は危険なのか
- ・現代日本人の栄養不足を解決するには
- ・力を加えて植物を育てる ～宇宙移住のために～
- ・水道水の飲用としての安全性
- ・ラーメン店の成功要因と改善点 実店舗を持つとしたら
- ・高校生に朝食は必要かどうか ～高校生の欠食問題の打開策について～
- ・お米は今後も日本の主食となれるのか
- ・米の成分について ～機械分析と人間の感覚の違い～
- ・味覚は先入観の影響を受けるのか
- ・感覚特性の味覚への影響の世界における差異
- ・日本におけるフードロスを減らすには
- ・うまい讃岐うどんを作る
～小麦製作者、小麦粉製粉業者とうどん職人、三位一体のこだわり
- ・ガリガリ君はなぜ人気なのか
- ・トマト嫌いがトマトを食べられるようになるためには
- ・未認可国際汎用添加物4品目に於ける妥当性の評価
- ・遺伝子組み換え技術の今とその諸問題の解決策
- ・食事マナーの相違点の起こり

《日本（文化）に関するテーマ》

- ・『人間失格』中の「侘びしい。」の英訳
- ・百人一首の英訳
- ・空蝉と夕顔はなぜ存在したか
- ・枕草子から見る中宮定子と彼女の与えた影響
- ・「方言コスプレ」からみる日本人の方言への意識の変化
- ・子供の印象に残るお菓子のCMとは
- ・日本刀に纏わる逸話と日本人

- ・折り紙、風呂敷から考える日本文化について
- ・どうしたら竹を有効活用できるか
- ・日本人の集団心理 ～なぜ日本人は同調するのか～
- ・日本人は本当に“面白くない”のか？
- ・房総と西日本の文化のつながり
- ・沖縄の長寿の秘訣
- ・香港の長寿の要因と日本への適応化
- ・流行語大賞から見る流行語の傾向
- ・面白い小説の特徴について
- ・神話とは何か
- ・池泉鑑賞式庭園の根幹
- ・日本人はなぜ時間に厳しいと言われるのか
- ・日本の子供の貧困問題についての改善方法の模索
- ・印旛沼における生物による自然浄化機能の利用について
- ・検見川の浜のイソギンチャクの生態
- ・下総台地における土地利用の変化と農村の今後
- ・シカによる森林食害の対策
- ・秋川における国内外来魚（カワムツ等）流入による影響

《グローバル社会に関するテーマ》

- ・国際補助語としての計画言語の可能性をさぐる
- ・多文化共生社会の実現に向けて
- ・理想の多民族国家とは
- ・子供の貧困が起きる原因とその解決策
- ・諸外国に倣う、日本の英語教育への提言
- ・日本の教科書は加害の歴史に向き合っているのか ～シンガポールとの教科書比較
- ・難民は解決できるのか
- ・機械翻訳の限界と可能性
- ・リーダーの育て方
- ・人はなぜ青を好むのか ～国旗と文化～
- ・国際連帯税・飼料作物税の導入の可否について
- ・アジアとアメリカでの女の人の"美しい顔"の基準の違い
- ・人はなぜ生きるのか ～キリスト教の人生観～
- ・モーゼ書に見えるユダヤ教の精神

③海外研修

S G H指定を受け、シンガポール研修、ベトナム研修、北京研修の3研修を新たに企画し実施してきたが、順次縮小し、今年度は3研修とも廃止した。3研修の国・地域は、S G H指定以前から本校独自の海外研修として実施しており、この期間は研修テーマを「食」に特化したコースとの2コースで実施してきた。しかし、長年の交流から現地機関との良好な関係が構築できており、既存の研修を修正して一本化してもS G H研修と同等の成果が期待で

きるものと判断した結果である。

また、他の既存の海外研修として、開校以来実施しているアメリカ研修やイギリス研修、ハーバード大学次世代リーダー養成プログラム、高2希望生徒約260名が参加する中国(西安・北京)修学旅行、中学3年生のほぼ全員が参加するニュージーランド研修を設定している。

その他にも、サッカー部のブラジル遠征、模擬国連、ワールド・スカラズ・カップ、科学の甲子園、ロボット・コンテストなどの日本代表として海外開催の各種国際会議やコンテストなどにも参加した。

すべてのプログラムが希望制であるが、SGHでの取り組みがグローバル化やコミュニケーション力、そして何より本校の考える「交渉力」の必要性から、参加者が年々増加傾向にある。

《海外研修等の概要》

①アメリカ研修 高1生12名(他に渋谷高から8名) 7/31~8/14

10日間のホームステイでは、現地コミュニティスクールに通い文化交流や語学研修を行った。キャンプステイでは、豊かな自然の中で、生態系や自然との共生意義を学んだ。

②ハーバード大学次世代リーダー養成プログラム 高1・2生24名(他に渋谷高18名)

7/29~8/5

ハーバード大学の学生寮に宿泊し、大学教授の講義、学生とのディスカッション等の高度で濃密な交流を通して、これからのグローバル・リーダーの在り方を学んだ。

③中国(西安・北京)修学旅行 高2生259名 10/8~10/13,10/9~10/14

日本文化の源流である中国を訪ねることで、日中の交流の長さや深さを知るとともに、現地の高校4校との交流会を通して、次代を担う若者たちとの相互理解に努めた。

④ベトナム研修 高1生10名(他に渋谷高から17名) 12/19~12/23

現地の農村を訪ね、農家の生活体験を通して現地の「食」文化を学び、グローバルな視点で食糧問題を考える契機とした。

⑤北京研修 高1生4名 12/21~12/28

相互交流校である北京月壇中学校の生徒宅にホームステイし、ホストファミリーとの市場調査や、家庭内の食事情をリサーチし、「食」を中心とした文化を学んだ。また、日系食品企業を視察し、現代中国が目指す新しい「食」の在り方を学んだ。また、グローバルな視点で食糧問題を考える契機となった。

⑥ニュージーランド研修 中3生約300名 3/7~3/21,3/8~3/22 予定

Waikato 地区と Wellington 地区の相互交流校生徒宅にホームステイし、相互交流校での授業や、近隣小学校での日本文化の紹介を通じた交流会に参加し、既習の英語力の確認を行い、今後の学習意欲に結び付ける。初めての海外経験の生徒も多く、価値観の相違や自己主張と受容の重要性を学ぶ機会と位置付けている。

⑦イギリス研修 高1生31名 3/19～3/29 予定

ロンドン郊外のボーンマスでホームステイをしながら、現地語学学校に通い、英語力の伸長を図る。ボーンマスは多くの語学学校が存在し、世界中から留学生が集う国際色豊かな街で、学校以外でも英会話学習や多様な価値観に触れられる。語学学校研修後は、オックスフォードを訪ね、歴史的建造物や古くからの学生街の様子を見聞する。

⑧シンガポール研修 高1生7名 3/21～3/30 予定

相互交流校の Raffles Institution の生徒宅や本校系列校の学生寮に滞在し、Raffles Institution の授業に参加し、交流会や文化に関するプレゼンテーションを実施する。また、多民族が共存し、短期間で飛躍的な発展を遂げた国際都市の特徴を学ぶ。

⑨ブラジル遠征 高1・2生22名 8/6～8/18

サッカー部顧問がブラジル国籍というの関係で、部関係者を中心に2週間の遠征を実施した。現地チームとの合同練習や試合を通して技術の向上を図るとともに、地域住民との交流を通して歴史や文化を学んだ。中でもサッカーが熱狂的に受け入れられる土壌を肌で学ぶことができた。

《相互交流受け入れ》

いずれも本校生徒宅にホームステイをし、通常の授業の他、日本文化に特化した特別授業、茶道、剣道といった日本独自の部活動にも参加して、交流を図った。

①北京首都師範大学附属中学校（中国） 4名（WIL参加） 7/23～7/29

②Raffles Institution（シンガポール） 8名（他に渋谷高に7名） 9/10～9/17

③Waikato 地区小中学校（ニュージーランド） 55名 9/10～9/27

④北京月壇中学校（中国） 8名 1/26～1/30

その他に、北京月壇中学校（中国）からサマーキャンプ（8/5～8/10）に40名の生徒が来日し、本校生徒も参加して妙高高原のキャンプ場や本校で交流した。

《長期留学生受け入れ》

①ドイツ、チェコ、韓国、アメリカから4名在学中（2018.9～2019.7）

②ブラジル留学生2名在学中（3年間）

④特別活動等

本校の考える「交渉力」を身につけるために、上記6の（2）実績の説明 ①授業でも詳述した通り、SGH指定の5年間にわたり、各教科による多角的なアプローチを実践してきた。

中でも、英語科は、国際社会で交渉の手段となる、「英語で議論できる力（主張と受容）」を養成するために、授業内外で様々な取り組みを試みてきた。その成果は、高校1年・2年

の課題研究発表会に顕著であった。SGH指定直後は、英語でのプレゼンテーションとなると帰国生中心になりがちであったが、年々帰国生以外の一般生も英語でのプレゼンテーションに挑むようになった。現在では、生徒全員が英語でのプレゼンテーションを実施した。英語プレゼンテーションが常態化し、抵抗感が薄れ、楽しみながら自然に取り組めるようになった意識改革が大きい。その結果、内容の広がりや深化とともに、聞き手を意識した伝わる発表が形になってきた。

また、上記 6 の (2) ①家庭科で示した特別講演会の他に、本校独自の「CAREER EDUCATION」を実施している。本校進路部のスローガン「Global(国際性)・Leadership(リーダーシップ)・Foresight(先見性)・Curiosity(好奇心)」の頭文字を並べた「GLFC」と照査しながら策定するようにしている。加えて、次期教育課程の改定における中教審の基本的方向性にも示されている「社会に開かれた教育課程」の理念に準じた内容の具現としてのキャリア教育の実践を企図している。以下が今年度実施の GLFC 講座である。

- ①家庭裁判所調査官による「家庭・人・社会の架け橋」と題したセミナー 25名 東京家庭裁判所主任調査官・江口文氏(本校14期生)
- ②東北大学工学部模擬講義「環境問題に貢献する金属材料」と題した模擬講義 25名 東北大学工学部・三木貴博准教授(本校4期生)
- ③起業セミナー 30名 日本政策金融公庫職員による起業を意識する生徒のためのセミナー
- ④Becoming American Lawyer 25名 アメリカ人弁護士によるアメリカの法制度や Law Schoolでの学びに関する英語でのセミナー
- ⑤防大・防衛医大セミナー 30名 防衛省職員による防衛大学校・防衛医科大学校に関するセミナー
- ⑥東京大学見学セミナー 70名 本校30期卒東大生たちによる東京大学本郷キャンパスの校舎・施設の見学と卒業生によるセミナー
- ⑦キャリアガイダンス 高2全員 一般企業で活躍する本校卒業生と東大生によるキャリアガイダンス
- ⑧千葉大学医学部模擬講義 60名 千葉大学医学部・丹沢秀樹教授による「人が勉強をする本当の理由」というテーマの模擬講義
- ⑨哲学をテーマとしたバイリンガル授業 30名 都留文科大学・山辺恵理子講師による教育哲学をテーマとした、英語を基本としたバイリンガル授業(読売新聞掲載)
- ⑩東京大学の女子学生による座談会 20名 東京大学生の3名の本校卒業生による本校女子生徒との東大での生活に関する座談会
- ⑪進路講演会 中3～高2全員 東京医療センター名誉院長・松本純夫氏による最先端医学に関する講演会
- ⑫東京大学工学部模擬講義 60名 東京大学工学部航空宇宙工学専攻・小紫公也氏による「未来のロケット推進」と題した模擬講義
- ⑬共同通信社見学セミナー 25名 共同通信社を訪問して、車内の見学と現役の記者、カメラマンらによるセミナー
- ⑭メディカルセミナー 25名 国際医療福祉大学医学部(成田市)を訪問しての模擬講義とシミュレーション施設での実習体験
- ⑮グローバルセミナー 30名 国際連合の工業開発機構(UNIDO)の高橋奨氏(本校18期)

による「世界で働くということ」をテーマにしたセミナー

⑩東京大学研究セミナー 約 300 名 東京大学・栗田佳代子准教授の講演と、本校卒業生 3 名を加えた「東京大学での学び」をテーマとしたパネルディスカッション

⑪メディカルガイダンス 35 名 本校卒業生の医師、医学部生 3 名による「医師になるということ」をテーマとした講演とパネルディスカッション

7 目標の進捗状況、成果、評価

中間評価で指摘を受けた、「食」と「交渉力」の関係の明瞭化、SGH活動の全校化を意識し、改善を図った。まず、文化の中心と言える「食」の再確認を行い、すべての教科で「食」に関連する学習分野を再検討し、シラバスに明示した。学習内容とSGH活動の関連を強化するとともに、「食」以外の文化面への波及を期待した。

次に、「交渉力」の定義を再確認した。多様な価値観の中での交渉には主張と受容のバランスが重要で、「Win-Win の妥結」こそがこれからのグローバル社会で求められる交渉力だということを前提に、分析力、論理力、説明力を磨いた。

「世界に雄飛するグローバル人材の育成」というSGH事業の目標を実践するために、SGH申請時から、最終年度には、英語による世界規模の高校生会議の開催を計画しており、日々の活動の集大成となるよう様々な活動を計画し実践してきた。本学園の幕張高等学校と渋谷高等学校主催で、7月末の5日間にわたって開催した「Water is Life 2018」は、5 管理機関の取組・支援実績の(2)で詳述した通り、大きな収穫を得る事ができた。「多角的アプローチ」によるSGHプログラムの取り組みや、通常の活動が密接に連動して、最終テーマである「交渉力の育成」が、順調に進展した結果と判断している。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

SGHの指定により教育課程を変更することはしなかったが、SGH事業が目指す「グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際社会で活躍できる人材の輩出」は、本校の教育目標である、「自調自考」「国際人としての資質」「高い倫理感(分析に基づく「観」ではなく、反応ともいえる直「感」力)」を養う、に合致し、指定前から授業や諸活動での取り組みに「交渉力 Win-Win の妥結点を探る」養成の試みがなされてきた。従前の内容をさらに発展させ、生徒自身が達成感を得られるよう発表や自己評価の機会を増やし、一層の動機づけを行った。

(2) 高大接続の状況について

東京外国語大学との連携により、毎年留学生との交流会を設定し、「食」を中心とした自国の文化紹介プレゼンテーションや、ランチミーティングで和やかな雰囲気での交歓ができた。「食」に関わる限り、全員が幸福な気分で参加できることを痛感し、その意味でも、「食」が文化の中心であることを実感できた。

(3) 生徒の変化について

毎年度終了時の振り返りアンケートでは、どの質問事項に対しても圧倒的な肯定回答が寄せられた。特に、各学年の課題研究発表会は一年間の取り組みの集大成的位置づけであったため、肯定割合は高かった。最終的に代表チームとして選抜されなかった生徒も満足感を得たことが確認できた。（研究報告書参照）

また、英語検定試験の1級、準1級取得者が急増した。SGH活動を通してグローバル社会での交渉ツールとしての英語力の重要性を再確認し、生徒各自の英語力の客観的指標の一つとして英語検定試験を位置づけるようになった結果と言える。（研究報告書参照）

(4) 教師の変化について

(1) で記した通り、指定以前からの取り組みを発展させることでSGH目標を達成しようと捉えていたが、中間評価での低評価に危機感を抱き、SGH推進委員会を中心に教科会や学年会で意見を交換するようになった。その結果、教科内容の精選を行い、教科横断的な連携を意識するようになった。

(5) 学校における他の要素の変化について

危機感を抱いたのは保護者も同様で、保護者の立場での協力申し出が増えた。生徒が自らの意志で楽しみながら取り組んでいる活動を、満足感をもって終えてもらいたいとの思いからと考えられ、Water is Life や相互交流校来日時のホストファミリー引き受けや、各種発表会への参観でご協力いただいた。

また、生徒の課題研究の効率化を考えて、校内をWi-Fi化し、図書館の検索用PCを増設し図書検索を簡便化し、新聞データベース検索システムも導入した。さらに、プレゼンテーションの機会を増やすために、全教室のプロジェクターとスクリーンを最新式のものに変更し、簡単にセットできるようにした。

(6) 課題や問題点について

中間評価で指摘を受けた、「食」と「交渉力」の関係が不明瞭、全校的な取り組みが感じられないは、どちらも教員側の説明不足によるもので、中間評価後は改善を意識した。生徒の自主的取り組みに水を差す形となり大いに反省した点である。

(7) 今後の持続可能性について

繰り返し記したように、本校の教育目標に則り、通常の活動がグローバル社会を見据えた内容で構成・展開しているので、事業終了後もSGH目標を意識した取り組みを継続していく予定である。

【担当者】

担当課	渋谷教育学園幕張高等学校	TEL	043-271-1221
氏名	四方 秀紀	FAX	043-271-7221
職名	事務長	e-mail	makujimu007@nifty.com